

第3回南陽市自分ごと化会議 議事録

1 開会

2 全体協議（石井コーディネーター）前半

前回来た時はお盆ですごく暑い時期だったが、今回はそんなこともなく、車窓からは米沢を過ぎたあたりから稲刈りが始まっていることが見受けられた。季節が進んでいることを実感している。南陽市の皆さんにとっては稲刈りの光景は当たり前のものかと思うが、逗子市は珍しく、田んぼが一か所もないというちょっと変わった土地で、小学生が体験するような小さい田んぼぐらしか稲を見る機会がない。すごく新鮮な風景だった。今日は全4回の3回目にあたり、次回が最終回となる。アンケートでは、皆さんから運営の仕方やそもそもの会議の落としどころなどいろいろなご意見をいただいている。その中で一つお伝えしておかないといけないのがマイクの話。こういう会議では幅広い年代の方に参加していただいているので、それぞれ話す声の大きさや聞こえ方などが異なる。だからみんなにとってのベストな状況はなかなか作り出すことができない。そんな状況のためマイクを使うかどうかについては運営側としても悩んだが、今日は一旦マイクなしで進行したいと思う。理由としては、発言の際に手が上がったとき、マイクを持っていくとなるとどうしても間が空いてしまって時間ももたないため。もし聞き取りづらいつか、大きい声で話しにくいといった場合は教えていただきたい。私は現在50歳を超えたところだが、実はこのくらいの年齢でももう耳は衰え出していて、高校生の息子とスマホを使って高周波の音がどこまで聞こえるか試してみると聞こえる範囲にかなり差があることが分かった。普通に話していても実は結構聞こえる能力に差があるということはある。聞こえにくい場合は遠慮なく伝えていただきたい。ある自治体ではこのことを逆手にとって、若い人が夜集まる公園に若い人だけが聞こえる音をわざと鳴らして集まらないようにしているという事例もある。

前回のアンケートの中で、この会議の落としどころはどこなのかがわからないのでどんな意見を言ったらいいかわからないという意見があった。これについては、実は私にもわからないし、主催している南陽市の方で決めているわけでもない。一般的な会議ではAのプランにするのかBのプランにするのか、中間のA+Bにするのか皆さんに決めてもらいましょうという解を用意していることが多いが、この会議はそうしたシナリオを作らずにスタートしている。自由にご意見を出していただいて大丈夫。かといって言いつばなしで終わることもないように、無作為で集まっていた皆さんにいただいた意見は行政として尊重して活かしていく。何かを決定する会議ではないということをもう一度確認しておきたいと思う。

それでは中身に入っていきたいと思うが、今日初めて参加された方が二人いらっしゃるの簡単自己紹介をお願いしたい。

～～～自己紹介～～～

（石井コーディネーター）

一ヶ月前の前回会議の時は中学校(中学生)の教育環境について皆さんから自由に意見をいただいた。その中で、トイレの洋式化の工事がだいぶ進んだが、実際に使ってみたら依然として臭いが気になるということや、陸上のトラックがないため部活の練習のために市外まで行かないといけないということなどの施設の話や、中学校3校という体制を今後どうしたらいいのだろうかというような話をしていただいた。今回も同じテーマについて自由にお話しただくという趣旨ではあるが同じ市の中の皆さんだけで話し合っていると行き詰まる、アイデアが止まってしまう側面があるため、今日はナビゲーターという形で外部の方をお招きしている。

その方のお話を聞いていただき、またアイデアを出していただきたいのが前半の一時間半の内容となる。後半は前回の続きとしてナビゲーターのお話以外の部分までもっと自由にお話ししていただきたいと思っている。次回の第4回目は、今までの3回のお話をまとめて整理をして集約していく形になる。したがって、今日は自由にお話ししていただける最後の時間になるため、ぜひ積極にご意見をいただければと思っている。会議中はどんどん意見を言っていただきたいが、皆さんからいただく意見はできるだけ正確に把握したいので、お配りしている改善提案シートを埋められる範囲で記入していただきたい。しかし、シートを書く時間はなかなかとることができないので、皆さんのお話を聞きながら思いついたところでメモをとっていただきたい。

【改善提案シートの書き方(ルール)について。】※改めて説明

シートには「あなたが考える あってほしい姿」と「あなたが考える課題」と記載がある。先ほどの例で考えると、「あってほしい姿」は「綺麗で快適なトイレ」で、課題は「学校のトイレが汚い、臭い」となる。しかし、このことについては、学生が課題だと思っても、学校のトイレは汚くて当たり前だと思っている人からすれば全然課題ではない。課題と思うかどうかということについては皆さん一人ずつ異なる。個人的な意見で全く問題ない。そして課題に対して個人、地域、行政、民間(その他の主体)それぞれ何ができるかということを書いていただきたい。

逗子市には海があるので 7,8 月は海水浴場を開いている。海水浴場のトイレをきれいに維持するのはコストもかなり結構大変だが、ある年、公衆トイレを綺麗に保つ薬剤を製造している会社が、市内の小さなトイレを管理してくれるということがあった。このように、民間(その他の主体)が協力してくれることもあり得ない話ではないので、アイデアとして書いていただきたい。書いたことを必ずしないといけないということではない。

それでは、前半としてナビゲーターの紹介、お話に進みたい。前回は、これからはなかなか生徒が増えていかないという現状から、運動部のチームを作ることができない、吹奏楽も大きなバンドを作るには生徒の数が必要、などという話題を中心に具体的な学校の数や人数のデータもいただきつつメリット、デメリットを整理しながら統廃合の話を進めた。その中で、近隣の市町でも中学校の統廃合が進んでいるという現状も紹介した。今回は南陽市の話だけではなく、他の自治体の話を聞くのもいいかと思い、ナビゲーターをお呼びしている。近い自治体の方からお話を聞くのもいいかもしれないが、今回はあえて皆さんからは遠いところにある横須賀市で教育総務部長をされている古谷さんに来ていただいている。横須賀市は実は逗子市の隣にある37万人の大きな都市である。私は横須賀市の出身で、私が中高生の頃は43万人都市といわれていた。逗子市は5万5千人くらい。年金事務所や児童相談所などの大きい行政機関は横須賀市にあることが多いという状況。このあたりで考えると南陽市と米沢市のような関係にあるといえるかもしれない。横須賀市は大きな街であるため、学校の統廃合についても様々な経験を持っておられる。皆さんには遠くのまちの話を聞きながら南陽市の事例に置き換えたりして統廃合の問題について考えを巡らせてみていただきたい。

(古谷ナビゲーター)

横須賀市の教育委員会事務局で教育総務部長を務めている古谷久乃と申します。今日は参加させていただきありがとうございます。逗子市とは隣町で、以前から石井さんとはご縁がある。山形には身内の実家があることから、何度か訪れたことがある。

今回の自分ごと化会議には若い方が積極的に参加されていて、まちに元気を感じた。横須賀市でこうした会議をしても10,20,30代の方はなかなか参加してくださらない。自分ごと化会議というのは、自分たちのまちのことを他人まかせにしない、行政まかせにしないという取り組みだと思っており、会議の中で皆さんから

いただいた意見というのは非常に貴重だと考えている。今日は小中学校の統廃合などの教育環境の整備について横須賀市の取り組みをお話しさせていただく。最後に問われるのは地域住民との合意形成は図ることができたのか、ということになる。100%の合意形成はありえないと思っているが、いかに取り組みの背景や目的をご理解いただけるかということが重要だと考えている。横須賀市はカレーのまちということで PR しており、場所は神奈川県の大磯半島に位置し、三方を海に囲まれていることから、海上自衛隊やアメリカの海軍基地などがあり、基地のまちとしても知られている。非常に温暖で魚や野菜がおいしく、釣りやウインドサーフィンのようなマリンスポーツも盛んなまちである。しかし、半島の定めとして、鉄道や道路が先に抜けていかず詰まってしまうことから新しい住民があまり入ってこず、4, 50年前には宅地開発をどんどん行い、一気に人口が増えたが、当時の人々がそのまま高齢化しているという現状にある。これらの影響により人口減少が加速度的に進んでいるという状況にある。

配布している資料の中に横須賀市のもの「横須賀市の教育環境整備の取り組みについて」があるが、最初のグラフは市内の人口の推移を表している。ピーク時は平成2年ごろの43万人となっており、最近では37万人まで落ち込んでいる。高齢化率については南陽市(31%)と同程度で、横須賀市は神奈川県の中でも比較的高齢化率が高く、32%をこえている。また、年少人口(15歳以下の若い子どもの世代)は南陽市(12.1%)よりも少し高い。資料の真ん中の薄い色の棒グラフは小学生の数の推移、黒い棒グラフは中学生の数を表している。ピークは今から約40年前の昭和56年であり、小学生が4万5千人、中学生が2万2千人となっている。その後はずっと減少しており、令和3年においては小学生が1万7千人、中学生が9千人とピーク時の約三分の一程度に減少している。一方で折れ線のグラフは小学校の数を、実線のグラフは中学校の数を表しており、子どもが一気に増えた時期に学校をどんどん建設したが、現在では子どもの数が三分の一になっているにも関わらず学校の数はピーク時のままとなっている。つまり、一校あたりの児童数はかなり減ってきている状況。一番下の円グラフでは左は小学校の、右は中学校の規模別の割合を示している。円グラフ内の白い部分が横須賀市独自の適正規模(小中学校ともに12~24学級)である。現在は適正規模の学校がどんどん減ってきており、特に小学校については12学級の学校がたくさんあることから、それらは近いうちに小規模校に移行するといわれている。学校の規模を表すのはその学校のクラスの数となるので、これからの話はそのことを前提とさせていただきたい。横須賀市の学校規模の定義は出展に記載されている「横須賀市立小・中学校の適正規模及び適正配置に関する基本方針」に明記されている。この方針を作成したきっかけは、今から約20年前に市内のいくつかの小中学校で少人数の学校の課題が顕著になり、それらを解消するためである。

小中学校ともに適正規模としているのは12~24クラスだが、これは小学校であれば12クラス(各学年2学級)あればどの学年でもクラス替えができるということになる。適正規模内であれば、ある程度のまとまりの中で学年としての活動もでき、反対に規模が大きすぎることなく子供たちと先生たちが十分に関わりを持つことができるというメリットもある。なお、中学校については、学級の数が及ばず影響が小学校よりも大きくなる。理由としては、学校の先生の数や学級数によって決まるためである。学級数が少ない学校だと配置される先生の数も少なくなる。中学校は教科担任制となるため、小さな学校は9教科10科目の先生を配置できないという問題が起こってきている。その結果、国語の先生が免許を持たない技術家庭科を許可を得て教えている、数学の先生が英語を教えているといったことが横須賀市では実際に起こっている状況。また、先生数が少ないと部活動の顧問になることができる先生の数も減るため、部活動の種類に影響を及ぼすことになる。これらのことから、学校規模を定義し、極端に小さな規模の学校とならないよう隣の学校との学区の変更や統廃合などの検討を重ねてきている。

加えて、これからの教育環境を考える際には、少子化の問題だけではなく施設の老朽化のことも考えないといけない。南陽市の中学校2校については築年数が40年くらいだと前回の会議で紹介されていた。先ほど

申し上げた通り、横須賀市においても子どもが急激に増えた約40年前にどんどん学校を建てたため、ちょうどこれから大規模修繕や建て替えを検討しないといけない時期である。ところが、横須賀市は財政状況が非常に悪く、すぐにこれらにとりかかることはできない。コンクリート製の建物の一般的な耐用年数は最大80年とされているため、なんとか修繕をして80年を上限として使用することとしている。

資料の3の円グラフは横須賀市の学校施設の老朽化を示している。小中学校は現在市内に69校あり、小中学校の半数がすでに築50年を経過している。さらに築60年を経過している学校が12%(8校)ある。最も古い学校は築70年を経過している。この学校については建て替えがその場でできない学校となっており、近隣の学校との統廃合を検討している状況である。あわせて、児童生徒数の推計と照らし合わせながら、建て替えをするかしないかも検討している。

市全体としてはこれから人口がどんどん減っていくという状態にあるため、学校施設を含む公共施設全体の配置の見直しを行っている。人口減少に伴い市税の収入も減少するが、高齢者福祉や生活保護のような社会保障に対する支出はどんどん増えていくと考えられている。今後は莫大な予算をかけてこれまで通りの施設を維持していくことは非常に難しいだろう。公共施設の適正化については施設の利用状況やニーズ、地域的な偏りも考慮しながら検討しているところである。しかし、学校施設に関しては子どもたちの教育の場であり、地域の方にとっては地域活動の大切な拠点であることから単なる施設、ハコモノではない。単に数を減らしていくということではなく、基本方針に基づいて、地域の方の意見を聞きながら他の公共施設とは別で今後のあり方を検討している。また資料の4には、通学距離についても検討のための基準を記載している。この基準に該当したらすぐに統廃合を検討するというものではなく施設の老朽化など様々なことを勘案しながら進めている。具体的な基準は、小学校であれば11学級以下、中学校だと5学級以下(どちらもクラス替えができない学級数)。加えて、横須賀市では5学級以下の中学校には10科目の教員を配置することができない。そのほか、施設の老朽化が著しい場合などを総合的に判断している。また、通学距離についても考慮する必要がある。特に中学校の場合はかなり広範囲になるため、安全に通学できるかどうかが大変な論点となる。通学距離(学区)に関する国の基準は、小学校が4km、中学校が6kmを目安としているが、これは山間部なども含めた基準となるため、比較的都市部で近い場所に学校がある横須賀市では小学校は2km、中学校は3kmを目安としている。

横須賀市では昨年度から2地域の小規模学校の検討を開始している。具体的な手順は、それぞれの地域に対して、地域の方、保護者の方、学校の先生などから構成される地域別協議会をつくり、意見をいただき審議会において解決策について審議する。審議会では個別の地域のことではなく、全市的な視点での検討をしている。その結果を踏まえて教育委員会で最終的な判断をする。これら2地域の学校はともに100年以上の歴史をもつ小学校であり、地域の人々にとっては非常に愛着のある学校となっており、古い歴史のある小学校がなくなることへの意見が非常に多く出されている。保護者の方からは、通学が遠くなることや、通学路の安全性についての不安の声があがっている。なお、市内には全校生徒が32人しかない小学校があり、複式学級(2つの学年で1クラス)になっている学年もあるものの、少人数できめ細かく面倒をみてもらえることにメリットがあると考え保護者の方もおられる。一方で、こどもたちの教育環境について考えたときに、一学年1,2人で卒業するまで育てていくことが本当にいいのか、大人数の中で喧嘩や嫌な思いをすることも含めていろんなことを経験しながら学んだ方がいいのではないかという提案もすることがある。横須賀市の事例ということで、ざっくりとした説明にはなるが、以上で説明を終了したい。

(石井コーディネーター)

ありがとうございました。横須賀市は東京湾の東側に位置し、明治時代には軍港ができた。その影響を受け

て明治から昭和にかけて急に人口が増加した。当時建設された古い学校がたくさん残っている状況。今の小規模校の統廃合の事例については、山間部で駅から遠く離れているという場所のことではない。むしろ市内に電車もバスも通っていないところがほとんどない。ある程度交通の便はいいが、市内の人口の偏りによって統廃合が必要になっている状況である。私は横須賀市の人口がピークだったころに小学校から高校までを卒業している。我々の子どもの世代あたりから急に生徒数が減ってきていることをなんとなく実感している。横須賀市内でスクールバスを出している地域はあるか？

(古谷ナビゲーター)

今はない。ほぼ全員が歩いて通学している。一部、西側の逗子市との境のあたりは通学距離が4, 5kmになるが、路線バスが通っているため、教育委員会がバスを走らせているという状況ではない。今統廃合を検討している地域においては、統合後は最大で3kmほどの距離を歩く必要があるため、スクールバスを走らせるか路線バスを使用する際の補助を出してほしいという要望をいただいている。

(石井コーディネーター)

中学生の自転車通学は認めている？このあたりの地域は交通量の多さなども考慮して認めていないことが多いと思うが。

(古谷ナビゲーター)

認めていない。歩くか路線バスを使うこととしている。

(石井コーディネーター)

私なりにここまでの話を整理したが、追加で聞きたいことなどはありますか？

(委員自由発言)

小規模校が増えているということだが、学区をこえて通学することはできるのか？(自由に学校を選ぶことは可能か) 私が南陽市に引っ越してきたときは中学校を選択することができた。

(古谷ナビゲーター)

横須賀市においても数年前までは学校選択制といって中学校についてはブロックを定めて、そのブロックの中であれば自由に選ぶことができるという制度を行っていたが、だんだん通学範囲が広範囲になり、場所によっては10校以上の小学校からの生徒が集まり、指導面での支障が出るようになったため今は学校選択制は採用していない。小学校については地域とのかかわりが非常に強いということと、通学距離がのびてしまうことから、この制度を採用したことがない。

(石井コーディネーター)

地域住民との合意形成を図ることはできたのか、というお話を最初にしていただいたが、どんなところが議論の争点になったのか。具体的な事例があれば紹介していただきたい。

(古谷ナビゲーター)

学校にはある程度の規模が必要だとか、総論の部分には賛成してくれる。しかし、個別具体の自分の地域の学校の話になると、地域の方も保護者も愛着があるのでいろんな意見が出てくるようになる。これについて

は、100%の合意形成を図ることはできないので、十分に意見を出していただいて納得はいかなくてもご理解いただくところまで話をするしかないと考えている。

(石井コーディネーター)

小学校のケースと中学校のケースでの違いはあるか？

(古谷ナビゲーター)

同じだと思う。しかし、地域活動が小学校単位で行われることが多いことから、おらが村の小学校というような形で小学校に対する愛着の方が地域の方は強いと感じる。中学校については、小規模化してくると部活をはじめとしてダイナミックな活動ができなくなってしまうという困りごとが学校側に生じてくるため、保護者の方や地域の方にもご理解いただきやすいかと思う。実際に小規模なりのメリットを生かしながら運営していた中学校が統合となった際は、地域の方も保護者の方も子どもたちも中学校に愛着があり、自分たちの中学校がなくなるのは嫌だという意見が出されかなり議論を重ねた。しかし統合後は今まで小規模校にはなかった部活ができるようになり、逆に小規模校にあって大規模校の方にはなかった部活もあり、さらに子供たちの活動の幅が広がったということもある。また、横須賀市では各中学校において合唱コンクールを実施しているが、一学年に1, 2クラスしかない学校の合唱コンクールと5, 6クラスある学校のものでは全く異なるため、小規模校の生徒は大規模校の発表を聞いて感動して帰ったこともある。このように、中学校の場合は小学校に比べて理解が得やすい経験がある。

(石井コーディネーター)

小学校の方が一人ひとりに目が行き届く環境を重視される傾向にあるといえるということかもしれない。中学生になると軽視されるわけではないが、生徒の個性ややりたいことを選択肢の多さ、みんなで何かをするという経験などの方に比重が置かれているのかもしれない。

地域別の協議会については、それぞれに思っていることに違いがあるのか、総論賛成で意見がまとまっているのか教えていただきたい。

(古谷ナビゲーター)

最初から統合ありきで検討しているわけではないが、なんとなく片方の学校が吸収されてしまうのではないかという雰囲気は漂い、吸収される側の学校の地域の方は根強く反対意見を唱えることがある。保護者の方についても同様。しかし教員(審議会に参加するのは校長)は発言するのが難しい立場とはいえ、子どもの教育環境を考えるとある程度の規模が必要だということについて、実体験をもとに意見を挙げていただいている。

(石井コーディネーター)

ここまでの話で質問や思いついたことはありますか？

(委員自由発言)

私は小学校が複式学級だったので、経験として実感しているメリットはいくつかある。例えば、一年生の時に二年生の授業が聞こえてくるので、一年生の段階で九九が言えた。他には、二学年で一人の先生しかいないので、先生が二年生の算数の授業を教えている時間は一年生の生徒の一人がミニ先生(その日のリーダー)

となり自分たちで授業の進行をする。この時、自分たちで採点まで行うため、なぜその回答を選んだのかということを論理的に説明する力が身に付いたと思っている。このような自分の経験から、小学校の複式学級はいいなと思えるが、中学校は経験したことがないのでわからない。

(石井コーディネーター)

中学校の人数は何人くらいだったか。

(同上委員)

私の時は全校生徒が 230 人くらい。小学校の頃は 18 人だったので私にとっては大人数だった。

(石井コーディネーター)

その時のギャップは実感したか。

(同上委員)

友達ができるか不安だった。また、小学校では人数が少なかったため手を挙げなくてもいつでも発言できる環境であり、自分の意見を持つことが当たり前で埋もれてしまうことがなかった。他には、小学校のころは人数が少ないためみんなと仲良くしないといけない環境だったが、中学校に進学して人数が増えたことで、全員と仲良くする必要はなく、気が合う生徒とそうでない生徒の距離の取り方が難しかった。

(委員自由発言)

横須賀市において統廃合を進めている中で、結局統廃合にならなかった例というのはあったか？

(古谷ナビゲーター)

中学校についてはないが小学校ではある。地域別協議会の中で非常に反対意見が強く、自分たちの学校は自分たちの地域でやっていくという意見が出て、最後まで結論がまとまらず中止となった。その学校は小規模とはいえ一学年 2,30 人は在籍しており、今後の状況を見ながら再検討するというでいったん中止にしている。今話が進んでいるのは複式学級が発生している規模の学校と、建物を今すぐ建て替えないといけないが今のままでは建て替えができないという状況にある学校。地域の反対を押し通してまで統合を進めていけるわけではなく、理解を得ながら進めるというのは難しいことだと実感している。

(石井コーディネーター)

今の話は自分ごと化会議的にはある意味興味深い話で、自分たちの学校は自分たちの地域でやっていくとはいえ、自治会長が校長先生を担うわけにはいかない。どの部分を地域で担っていくのか。

(古谷ナビゲーター)

学校の授業の中に地域の人が入ってきてくれていて、歴史の話をしてくれたり、学校行事を地域の人たちが協力してくれている。

(石井コーディネーター)

全国的に学校を地域で運営したり、関わったりする事例がある。施設のペンキを塗ったり動物の世話をしたりしているということもある。その学校も同じような状況にあるのだろうか。

(古谷ナビゲーター)

当時は地域別協議会はなかったが、運動会などの行事も地域の人たちに入っただいて実施している。

(石井コーディネーター)

そうすると教育委員会が統合の話を持ちかけても、我々(地域の人たち)がやっていくという話になる。

(同上委員)

小規模の学校にはその学校の良さがあり、残したいと思う気持ちもあるが、行政側から統合を持ちかけられると仕方ない部分もあるのかと思っていた。

(古谷ナビゲーター)

小規模校のメリットというのは本当にある。また、小規模校のデメリットの面が出てしまわないように先生たちがすごく頑張ってくれているということも事実。

一人一人に細やかな指導ができるということも大事だが、大勢の意見の中で子どもたち同士で高め合っていくことが必要な場面もあるため、学校ではいろんな規模の活動ができてこそだと思っている。小規模校においては小さな規模の活動しかできないため、教育委員会の立場としては適正規模になるべく近づけたいと思っている。

(委員自由発言)

横須賀市において部活動の地域移行は行っているか。

(古谷ナビゲーター)

そんなに進んでいないのが現状。理由としては、地域に移行してもスポーツ団体等の受け皿がないことが挙げられる。今はどのスポーツをどの団体がみてるのかという調査をしている段階にある。中学校の規模はどんどん小さくなってきており、部活はあるのに子どもがいないという状況が発生しているため、複数校での合同チームは常に発生している。

(委員自由発言)

横須賀市の資料の2のR5学校規模別割合のグラフを見ると、中学校については小規模校の割合が61%となっているが、話を聞いている限りでは積極的に統廃合を進めているようには感じなかった。その理由は会議での反対意見があったからだろうか。

(古谷ナビゲーター)

現在2校の小学校について検討を進めているが、中学校についても課題のある学校はある。順番に進めている状況であって積極的に進めていないわけではない。小学校において11学級(各学年最低2クラスを満たさない状況)となるとクラス替えのできない学年が発生する。学校にとってクラス替えができるかどうかというのは学校運営上非常に大きなポイントであり、例えば子ども同士のトラブルが発生したとしても、次の年にクラス替えができれば生徒同士を離すことができたりする。このことから、クラス替えのできない規模の小学校を優先的に検討することとしている。

(石井コーディネーター)

資料を確認すると、市内に現在23校の中学校があることがわかるが、すべての学校を適正規模にしたとすると最終的に何校にするべきかということは、単純に生徒数で割った場合計算ができる。しかし、その数字だけを見て今後の計画を決めてしまうのではなく、定められた基準をもとに地理条件なども考慮しながら丁寧に1校ごとに配置を考えている状況かと考える。どこの小学校の生徒がどこの中学校に進学するというある程度のまとまりがある中で進めていく必要がある。ケーキを切り分けるような形ではなかなか進まないのが現実。

(委員自由発言)

地域別協議会の構成メンバーのことにについて、地域の方、保護者の方、教員などから成り立っているとのことだが、この協議会の人数はどれもだいたい同じくらいか。

(古谷ナビゲーター)

だいたい決まっている。例えば、二つの地域の統合であれば、それぞれの町内会長、校長先生、PTA会長等や未就学児の保護者、他には地域の特性に応じて教育関係者などにも参加していただいている。人数にすると約10名で構成されている。

(同上委員)

協議会に参加するにあたっては町内会長個人の意見ではなくて、事前に地域からの意見を聞き取ったうえで参加しているという認識でいいか。どうしても行政から話があるとその通りにするしかないのかと思ったため、いい取り組みだと思う。

(古谷ナビゲーター)

事前に意見は聞いていただいている。最初から統合ありきで話が進むわけではなく、この地域の小学校にはこうした課題があるという説明から入り、この課題を解決するためにはこんな方策が考えられるという選択肢を教育委員会側からいくつか提示するとともに、協議会メンバーからも意見をいただくという流れになる。現在、それぞれの地域においてそれぞれ5回ずつ協議会を開き、ある程度のところに意見が集約されてきたため、審議会の方へまとめた意見を提出したところである。

(石井コーディネーター)

最初に統合ありきで何年後にどの学校が統合しますということを打ち立てるのではなく、生徒数が減少している中でどんなデメリットがあるのかを説明し、その課題に対してお互いで方向性を決めていくというイメージかと考える。

(古谷ナビゲーター)

実は、20年前に小学校と中学校の統合を検討したことがあり、その時は教育委員会がどの学校が何年後に統合するという案を作って地域に投げかけたが、自分たちの地域の学校のことを決めるのになぜ教育委員会が案を持ってくるのか、白紙の段階から協議させてほしいと言われた。さらに、教育委員会が将来についての何の方針も考えずに、ただ統合の計画だけ持ってくるのはおかしいと指摘されかなり紛糾したことがある。そのことを受けて、今は基本方針を作成しそれに基づいて、検討の基準に該当する学校から地域の方とゼロ

ベースで話をさせていただいているという経緯がある。

(石井コーディネーター)

今進められているところは、最初に地域に話を持ちかけてから期間としてどのくらい経過しているのか。

(古谷ナビゲーター)

昨年の5月から始まっているので一年半近く経過している。

(石井コーディネーター)

協議の期間は定めているか。

(古谷ナビゲーター)

明確に定めていない。回を重ねるごとに意見が集約されてきて、新しい意見が出なくなったところで協議会が終わるということになる。三回分の会議の予算しかないから三回で終わりというようなことはない。

(石井コーディネーター)

ありがとうございます。そのほか委員の皆さんから意見や思いついたことはありますか。

(委員自由発言)

自分たちの学校は自分たちの地域でやっていくという話があったが、その決定から何年か経過し、時間の経過とともに地域の意見が変わってきたというようなことはないか。

(古谷ナビゲーター)

その学校については結論を出してから10年以上経過しているが、地域の方がそのままいらっしゃるので、今のところ引き続き地域で学校を支えていただいている状態。

(石井コーディネーター)

10年が経過しているということは、支えておられる方々の中でも世代交代が進んでいる状況か、それともずっと最初の方々が頑張っているのか、いかがでしょうか。

(古谷ナビゲーター)

世代交代している部分もあるし、最初からずっと頑張っておられる方もいる。

(石井コーディネーター)

ということはその地域は地域活動の力のある地域だと思う。

学校施設は学校教育の場だけではなく地域活動の拠点でもあるということだが、これは学校そのものがなくなると困るのか、もしくは施設さえあればいいのか、そのあたりはいかがでしょうか。

(古谷ナビゲーター)

現在、横須賀市内のすべての小中学校が震災時の避難所に指定されている。また、投票所にも指定されてい

る。地域によっては祭りとの関りもある。このように、様々な面で地域と学校は関係しているので、学校がなくなったらどこでこれらの活動を続けていけばいいのかという声が上がっている。

(石井コーディネーター)

統廃合が進んでも施設は残るわけで、その施設のいくつかは給食センターとして使っている記憶がある。

(古谷ナビゲーター)

横須賀市の中学校はずっと給食ではなく弁当だったが、令和3年から中学校給食を始めた。その際の給食センター建設に関しては廃校になった小学校の敷地を活用した。

(石井コーディネーター)

給食センターは地域の方が使うことができない施設だが、その部分に対しての課題や意見はなかったか。

(古谷ナビゲーター)

あまりなかった。廃校になった小学校の跡地利用の事例としては、市が学校施設を売却し、医療系の専門学校になったこともある。目の前の小学校と合併したので、その学校がないとどうしようもないという状況ではなかった。

(石井コーディネーター)

グラウンドが残っているところはあるか。

(古谷ナビゲーター)

ある。部活動のために使っていたり、地域開放も行っているので体育館も同じように引き続き使っている。

(石井コーディネーター)

残ったところは残ったところなりにその地域ごとに活用している状況だということ。すべて売ってしまったところもあると。

(古谷ナビゲーター)

市立高校を売却したところは一戸建ての住宅街になっている。海辺にあった市立の小学校はヨットハーバーが併設された宅地になっている。活用方法はさまざまで、地域で活用しているところもあればそうでないところもある。

(石井コーディネーター)

前回のアンケートにて委員からいただいている質問がある。

(委員自由発言)

前回の議事録の4ページに「南陽市では国が定めている学級数・生徒数ではなく、市独自の基準にのっとった生徒数で地域に合った教育を進めており…」と記載がある。この部分について、国と南陽市の基準の違いをもう一度教えていただきたい。加えて、現在どのように運用されているのかも教えていただきたい。

(学校教育課 佐野課長)

人口規模は違うものの、南陽市でも横須賀市と同様の議論がこれまでからあり、平成12年に小学校の適正規模、適正配置の議論がされている。その際は国の基準を基本として見直していこうという方針だった。しかしながら、南陽市では、その数字で切ってしまうということではなく、地域の実情にあった対応を指定校ということを確認した。例えば、荻小学校については完全複式学級となっていることから3クラスしかない。こうした小規模についても、メリットを生かした教育活動を展開していこうと考えてここまで進めてきた。住民発意で統合の必要性についての意見が出てきた場合は議論を進めていこうと確認していた。平成21年、22年には中学校の再編を行っている。これについては、クラス替えができない単学級の学校が複数校生じる見通しがあったため実施した。その際、住民の皆さんとの意見交換の中で反対の声もたくさんいただいたが、最終的にはご理解をいただいて現在の3中学校の体制になっている。横須賀市との違いは地域が点在しているということで、通学距離も6kmをゆうに超えることがある。その場合は南陽市ではスクールバスを運行するという形をとっている。

このような経緯の中、小規模校の良さを最大限に発揮できるような教育活動を展開してきたが、荻小学校は現在11人となり、学年に生徒が1人しかいない、そもそも生徒が在籍していない学年もあるという状況。この状況を受けて望ましい教育環境とはどんなものかということを経験の方や保護者の方と意見交換し、今年度をもって荻小学校は休校とすることを決定した。

学級数を定めるための基準について、国の基準では35人で1クラスとしているが、山形県の施策では33人で1クラスとしている。これは、当初は国の基準がもともと40人で1クラスとしていた時に制定されたもので、今は国の基準が35人で1クラスとなっているので少しずつ山形県の施策に寄ってきているといえる。このため、山形県も制度を段階的に見直していて、今現在では小学校1年生から5年生までは35人学級、小学校6年生から中学校3年生までは引き続き33人学級としている。

(委員自由発言)

統廃合を実施するとなると、人数が少ない方の生徒に負担がかかると思うが、南陽市では小学校同士の交流があり、その先中学校で統合になったとしても顔を知った状態で統合するのでまだ負担が少ない。横須賀市では統合前の生徒同士の交流などの取り組みはあったらどうか。

(古谷ナビゲーター)

子どもたちが不安な気持ちを抱えたまま統合しないよう、特に統合前の1年間については両校の学校の子ども同士がいろんな面で協力したり、中学校の場合は合唱コンクールを一緒に行ったりしている。また、横須賀市ではもともと近隣の小学校で球技大会を行っている。先生についても、統合前から異動しておいて、いざ統合となった際に知っている先生が先に配置されているような状況を作っている。

(石井コーディネーター)

「統合する側」と「統合される側」のように二分されてしまい、対等な関係でなくなってしまうことはあるか。

(古谷ナビゲーター)

あくまでも対等な統合だということは説明する。特に今回検討を進めている学校についてはどちらも小規模校のため、どちらが統合されるという構造にはならない。なお、これまでの横須賀市の統合は、子どもが増えていた時代に分裂してできた学校が、生徒数減少に伴ってまた1校に戻るといった事例が多い。

(石井コーディネーター)

神奈川県ではここ数年、高校の統合が発生しているが、その際に学校名も校歌も校章も新しく作るとしているところが多い気がする。一方的にどちらかの学校にまとめてしまうのではなく、新たな学校として歴史を作っていくという姿勢を感じる。

3 全体協議 (石井コーディネーター)後半

(石井コーディネーター)

後半は、前回の続きのような形で、自由に中学生、中学校の教育環境についてお話しいただきたい。前回のまとめ資料を皆さんに配布した。皆さんの意見を全部入れているわけではなくて、ざっと整理をしたものなので、今日の後半と次回の方も少し追加して最終的な提案書として市に提出するという流れで考えている。今のところまだまだ皆さんの意見をもらいきれていない部分もある。役所に人もお金もいくらでもあればこんなことをやってほしいと皆さんが思うことが全てかなえられるが、とてもそういう状況ではなく、市役所でやらないといけないことはたくさんあり、全部の学校を綺麗にして環境をハイスペックにすることは現実的ではない。このような状況において、どこに重点的にお金を使うのか、あるいは地域や市民、民間の力でも担うことができる部分があるのではないかとということを含めてアイデアをいただきたい。役所がお金を使ってこうしたらいいよねということだけではなく、誰かがこの部分を担えば、みんなであるべきビジョンに進んでいくことができるのではないかとということ意識して意見をいただきたい。

そういう意味で、前半のホワイトボードで一部のみ残しておいた。(自分たちの学校は自分たちでやっていくという部分) 統合の話が出た地域が、この学校は自分たちの地域でやっていくと決め、10年が経過してもその状況は変わっていないという話だった。この例では、教育委員会に代わって地域がフォローしていくというものだが、統廃合関係なく地域の子どもたちに対してこんなことをしてあげたい、一緒にやっていきたいという気持ちは皆さんの中にもあるかもしれない。そんなことも意識しながら後半も進めていくことができればと考えている。前回から一ヶ月ほど感覚が空いた中で、中学校や中学生に対して思いついたことがあれば発言していただきたい。

(委員自由発言)

高校生になり活動的な友達とかかわりを持つようになったことで、自分は中学生のころに何をしていたか振り返る機会があった。思い返すと、ただ授業を受けてただけで学校の授業以外のことをあまり考えていなかったように思う。学校外で中高生でも参加できるようなイベントなどがあることを知らなかったので、中学生のうちに学校側から校外活動のことを告知してほしい。学校の授業以外に参加することで、人間性が育ち、今後の職業選択にも影響すると思う。知らないことに触れるだけでもいいのでは。

(石井コーディネーター)

一つの道を究められるような体験の機会があることをまずは知りたいと。今興味がある分野はあるか。

(同上委員)

今通っている学校では必ず一つのことについて研究しないとイケない。私は太陽光発電についておもしろいなと思い調べている。高校では、研究者の人を実際に呼んだり、地域の有名なコンピュータ会社に実際に出向き仕組みを教えてもらって学んだり、そういった経験から興味が湧いて生まれた。

(石井コーディネーター)

今の高校では総合的な探究という時間があり、1年生から3年生までの間個人のテーマを持って研究し、卒業論文とまではいかないものの、レポートを作るという授業を行っている学校が結構ある。私の息子は3年間魚のことに研究していた。こうした、進路につながるようなことを中学校や高校において取り入れていることが多い。中学生や高校生になると大人と対等にかかわることができるため、こうしたことを地域で提供できれば、興味のある子にはいい経験になると思われる。

(委員自由発言)

地域にはいろんな分野に「達人」がいると思う。例えば農業やそば打ちなど。そんな方がみんなに教えてあげられるような場が提供できれば、地域の人が力になれるのではないかと感じた。

(石井コーディネーター)

具体的にはどんな「達人」がいると考えられるだろうか。

(同上委員)

米作りや、南陽市で盛んな果樹栽培などが挙げられるのではないか。

(委員自由発言)

同じ高校に行っている南陽市出身の子が、白竜湖に関係した研究をしている。そこにしか生息していない生物の生態調査や絶滅危惧種についてなど、そういった地域に根ざした研究をしている子がいる。

(石井コーディネーター)

実際に小学校や中学校で地域の方に何かを教わる機会というのはあるか。

(学校教育課 佐野課長)

南陽市では、学校だけでは解決できない問題を地域の皆さんの力を借りて解決していく地域総合型教育を推進しているため、各学校で地域の方にご協力いただいているところである。南陽市において、先ほど話題にあがった「自分たちの学校は自分たちの地域でやっていく」という意見があった事例もある。例えば、荻小学校では畑の先生が何人もいて、様々なことを教わっている。より関心を高めていくというところでは、学習指導要領にも小中学校では総合的な学習の時間を使った取り組みを推進するという記載がある。高校のように専門的なことまでは踏み込めていないかもしれないが、海洋キャリア教育セミナーというものを開催し、海に関わる仕事に携わる先生に来ていただいたことがある。また、上級学校訪問ということで、中学生が大学や専門学校を訪れるイベントを実施している。農業のことについては、漆山小学校において、かなりの広さの田んぼを借りて田植えから稲刈りまでを総合的な学習の時間に実施している。これらの活動は幅広い分野で実施しているため、この先突き詰めていく仕掛け作りに関しては教員もスキルアップしていかなければならないと思っている。それぞれの学校に「達人」がたくさんおり、力をお借りしているというのが現状である。さらに、研究や農業体験といったことだけでなく、社会福祉協議会などとも協力しながらボランティアに取り組んでいる中学生もいる。高校生になっても地域の活動に積極的に参加する子もおり、こうしたネットワークは広がりつつあるように感じる。

(石井コーディネーター)

必ずしも本当の「達人」だけではなく、いろんな方が教育に関わっているということ。委員の方から何か教えられることはあるか。

(委員自由発言)

電卓のたたき方なら。

(石井コーディネーター)

今この聞き方をしたのは、これまでの話の内容だけではこのまちにある要素が本当に網羅されているかわからないこと、「達人」のレベルが高すぎる気がしたから。私の息子が通っていた小学校では「サマースクール」というものがあり、夏休みの最初の一週間に自由参加で興味のある講座に申し込むことができた。そのなかでは、まちの建設業(大工さん)が小さい椅子を作るという教室を半日で実施したり、東京のコンピューターメーカーに勤めている保護者が専門の話をする時間を設けたりしていた。「達人」と聞くとその道50年のような方をイメージするが、もっと小さい規模で学校や小中学生とコミュニケーションをとるところにハードルを下げると、より多くの方に自分たちの学校として小中学生の教育に関わっていけるのではないかと感じた。英語や数学は教えられないかもしれないが、自分が仕事で培ったことや趣味で培ったことを生かせる機会かと思う。

(委員自由発言)

先日、県庁で実施された食品ロスについての会議をオンラインで見ることがあった。私たち主婦にとっては、食品ロスの話は身近なものであり、こうした知識を伝えることができればと思う。「達人」とまではいかなくても、詳しい人はいっぱいいると思う。

(石井コーディネーター)

アイデア次第でいろんなテーマが出てきそうな気がする。どんな形で学校に関わることができるか、学校にどんな課題があるかということについては、もっとみんなで考えてもいいのではないかと思う。

(委員自由発言)

私が中学3年生のころ、自分たちの学年の保護者の職業の話聞く機会があった。新型コロナウイルスの影響なのか自分の弟の時はそれがなかったのも、たまたま実施されていたのかもしれない。

(石井コーディネーター)

最近では職業に関する授業や職業体験などを丁寧に実施している学校が増えているように思う。私も市役所の職員として学校に話をしに行ったことがある。このやり方だと5、6人からしか話を聞くことができないので、もっといいやり方はないかと感じた。私の息子が通っていた中学校では、体育館にブースを設け、それぞれの箇所に異なる職業の方が座っており、興味のある方から話を聞くことができるやり方を導入していた。一律に教室で話をするよりも、こうした形にすることでもっと興味をもって関わっていけると思う。

そのほか、地域が提供できそうなものはあるだろうか。

(委員自由発言)

小学5年生の頃、地域の方から教えてもらったことを生徒から他の人に情報発信する機会があった。大人から子どもに教えることはよくあると思うが、子どもから大人に発信するという地域のつながりがあった。

(石井コーディネーター)

地域が学校に何か提供する、子どもは教わる側と固定的に考えがちではあるが、子どもたちが今何を考えているのか、また子どもたちが学んだことを大人が知るということは非常に重要であり、おもしろいと思う。先ほど配布した改善提案シートのまとめを見ていただきながら、抜けていることがあれば教えていただきたい。施設の話や授業の話、放課後の話など。付け加えられるようなことはないだろうか。施設の話については、必ずしも学校の施設のことだけではなく、陸上競技の練習場所など中学生が使う施設のことを考えていただければと思う。

(委員自由発言)

前回の議事録の17ページのことについて、勉強する施設が市内に図書館しかないという話があった。学校教育課長からは、修繕後の宮内公民館に学習スペースを設けてほしいという意見が上がっているという話があったが、土日だけでもいいので公共施設に机と椅子を備え付けて開放してあげてほしい。最近、子育て支援の関係で小さい子ども向けに開放されている施設は見かけるが、中高生向きの施設についても考えていけたらと思う。

(石井コーディネーター)

高校生の年代の委員の方が多く参加していると思うが、皆さんそれぞれどこで勉強しているか。自宅、学校、もしくはそれ以外の場所など。

(委員自由発言)

市の図書館を使っている。この会場の2階。

(委員自由発言)

市の図書館を使うこともあるが、高畠町の図書館を使って勉強する。

(委員自由発言)

できれば図書館を使いたいが、家が図書館まで遠く車で乗せてもらわないといけないので、学校に残って勉強したりしている。

(石井コーディネーター)

中高生は部活もあり、地域的なこともあるので、唯一絶対の答えというのではないかもしれないが、もう少し中高生のために公共的に場を提供できないかという意見をいただいた。

(委員自由発言)

勉強できる場所というのは限られてはいたものの、私たちが学生のころは学校の図書館や公共施設が結構遅くまで開いていたと記憶している。部活も遅い時間までやっていたような印象がある。今は学校の閉まる

時間が早いイメージがある。小学生のための放課後の学童などは充実していると思う。どこの家庭も共働き、核家族化が一般的になっており、早く帰ってきた子どもと大人と一緒にいることができない場合が多いのでありがたい。中学校になると急にそれらが何もなくなってしまうが、これまでは部活があったので、その時間は学校でみてもらうことができた。今後状況が変わってしまうとどこで誰にみてもらうのか考えないといけないところではある。加えて、必ずしも図書館が近くにあるわけではないし、学校から図書館までも距離がある。そういうことを考えると、どうかなあと思う。

(石井コーディネーター)

部活が中学校での居場所となると、必ずしも自分にぴったりあった部活があるとは限らないので難しさもある。勉強の場も課題活動も含めて中高生の居場所、心地よく過ごすことができる時間をどう提供するかが課題となる。

(同上委員)

少し補足をすると、南陽市にある高校では現在も部活は原則強制参加のはずで、これは課外授業の替わりという位置づけになっていると聞いている。週2、3くらいの活動。ただ、学校によっては部活動について自由なところも当然あるので、部活動なしに自宅に帰ってくるお子さんもいると思う。何が一番いいのかは分からないが、勉強施設が多くあれば多いに越したことはないのかなと思う。

(石井コーディネーター)

中高生の居場所を大人が考えることは結構難しい。逗子市において、大きな公園の横に平屋でここの会場と同程度の部屋が3、4つある中高生向けの施設を建てた。1つはバドミントンやバスケットボールができる体育館、もう2つの部屋は一面鏡張りで防音になっており、ダンスやバンドの練習ができる環境が整えられている。しかし、建設から10年経過したが中高生にはなかなか使われなくて、結局小学生しか来ない施設になっている。中高生のニーズや興味を捉えるのは難しいと感じる。地域の方に先生になってもらって小学生から高校生まで絵や三味線や琴を教えるという講座を実施しているが、それも中高生にはあまり興味を持ってもらうことができていない。参加しているのは親に言われて来た小学生が中心。中高生向けの施設は、逗子市では苦戦しているのが現状。むしろ私が去年まで担当していた公民館において、フリーなスペースを設けたところ勉強目的の高校生が集まりすぎてしまうことがあった。

(委員自由発言)

米沢市の取り組みとして、夏休みにゲストハウスを一時的に企業が借り上げて開放していた。その場所では勉強だけではなく、友達と話して過ごしたり、飲食をしたり、映画を観ることもできる。

(石井コーディネーター)

まさに先ほど話をしたように、課題解決のために企業にもできることがあるという事例である。逗子市には、もともと3階建てのレンタルビデオ店だった建物の2階になぜか回転寿司店が入り、3階には同じくらいの広さの会議室があるという建物がある。その会議室は日中空いていることが多く、目を付けた近所の町内会の方が、その会議室を無料で借りて高齢者が集まる場(サロン)を開いている。無料で借りている分、会議室の下階で弁当を買っている。役所が間に入るとこの通りには進まないと思われるが、地域の方が直接やり取りできる環境ができていればすんなり貸してもらえることもあるという事例。企業が地域のためにしてくれそ

うなことはないかと考えるのがこれからのポイントになるだろう。

(委員自由発言)

中高生のニーズの部分について、静かな勉強スペースではなく、同級生のみなどと教え合うことができるスペースがほしいと中学3年生のころに思っていた。中学校を、土日の日中でいいので解放してもらえたら、友達と話し合っただけ勉強できるし、息抜きに体育館とか使えるのではないかと思った。

(石井コーディネーター)

静かに勉強できるスペースは図書館などがあるが、図書館で話をするわけにはいかない。かといって中学生で友達の家に行くことも大変な話、この場合はちょっとした自由度が大切か考える。

(委員自由発言)

生徒自身に要望や課題を聞く機会が少ないと思う。統合のことについても子どもがどう思っているか聞く必要があるのかなと思う。部活動の選択肢について言うと、以前、沖郷中学校のバスケット部がなくなるかもという話があったらしく、自分の弟がバスケット部のため、母に電話がきた。それに関して生徒には聞かないのかなと思った。地域や行政の人が子供たちのために考える場はあって、今もそうだが、子ども自身に聞くことも大切なのかなと思った。

(石井コーディネーター)

まさに今日がそうで、皆さんは中学生OB,OBであって中学生本人ではない。統合は先の話だとしても、今の当事者は中学生で、当事者の声をどう聞いていくかが重要。正しい表現は忘れたが、障がい者の方の運動におけるすごく有名な言葉に「当事者の私たち抜きに私たちのことを決めないでくれ」というものがある。障がいのある方々は力の弱い存在だと思われるので、周りにいる強い力のある側がある意味思いやって何かを決めてしまうことがしばしばある。中学生くらいになると十分に意見も言えるし、若者の声をちゃんと聞きましようという法律も定められた。当事者の意見を聞く場というのはなかなかないので、どうすればその場が実現するかというのは難しいところだが、先ほどの部活の話のように聞けるところは聞いていくことが非常に重要だと考える。

なお、改善提案シートに課題を書き添えていただく際に、実現できるかどうかを考えすぎると範囲が狭くなってしまいうので、できる限り書いていただいた方がいい。初回に紹介した小学生が30数人で高校生になるとみんな村外に出てしまう自治体の話をしたが、その時に「そもそも900人の村に高校をつくることはできないだろうか」という発言をされた方がいた。普通に考えると村内の高校生は1学年に10人もいないため無理な話だが、四国の小さいまちが高等専門学校をつくったという話が最近にあたりもする。村外から高校生を呼ぶことができれば、非常に困難ではあるものの高校をつくるということもあり得ない話ではない。そんなところからも物事を考えていくことはできるので、これが理想でこれが必要だというものがあれば少し飛び越えてでも考えてみるのが重要である。

(委員自由発言)

市内の中学校で、軟式テニスの全国大会で何度も優勝している学校がある。彼らの中で今も市内に在住の方がいればコーチとして迎え入れて指導していただければと思う。私が子供のころはそうしたことがしばしばあった。

(石井コーディネーター)

テニスコートが立派な学校は宮内中だったように思うが、今も強い？

(学校教育課 佐野課長)

今年度も宮内中から1ペアが全国大会に出場している。

(石井コーディネーター)

OBやOGの中に地元に残っている人がいればうまく部活の地域移行ができる可能性もありそう。

(学校教育課 佐野課長)

部活動の指導者の発掘についてだが、まず教員が顧問として指導しているものと外部指導者ということで地域の方の力をお借りして技術指導に当たっていただいているものがある。この部分の引継ぎが上手くいっている種目とそうでない種目があり、休日の部活動を地域に移行するにあたっては教育委員会としても各関係者と協力して進めていかないといけないと思い取り組んでいる。卒業生が帰ってきてくれるという循環が上手く進めば持続可能な取り組みになるのではないかと考えている。

(石井コーディネーター)

逗子市では60代70代の軟式テニス協会所属のプレーヤーが中学生にかなり教えている。なぜかという、ほとんどの大人は硬式テニスに進んでおり、この方たちが指導しないと協会がすたれてしまう。今の意見においても、中学生のころ強かった人たちがうまくもどってきていい流れが生まれればいいと思う。

(委員自由発言)

中学生の時期って思春期で、心のケアというか、学校に行きたくないとか、人間関係のこととか、生きるのが辛いとかあるが、心のサポートが手薄に感じた。カウンセラーの先生は週に何回か来てくれるが毎日ではない。自分は赤湯中だったが、保健委員会で心のサポートをする機会があったがそれだけでは足りない。カウンセラーの先生が毎日来てくれるわけではないので、心のサポートを徹底した方がいいと思った。

(石井コーディネーター)

最近では養護の先生だけではなく、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどが週に一回学校に入ってきて、個人的な課題はカウンセラーの先生に、複数の人間関係だったり家のことだったり福祉的なことであればスクールソーシャルワーカーに相談したりすることができる環境が少しずつ構築されてきてはいるものの、すべての子どもたちの課題が解消できるわけではないため、もう少し増やせないかというのが今の意見。

7, 8年前まで逗子市では大学生などに学校に来てもらい、カウンセラーと面談するというよりも一緒に話が気軽にできるような人を呼んでいた時期があった。他人の話を聞くうえである程度の素質は必要になると思うが、高いレベルの資格がなくても、例えば教員志望の学生などの若い世代が関わることができないかと思っている。悩んでいる子どもと向き合って相談というよりも、気軽に話すことができる関係を作ることも大事である。

(同上委員)

赤湯小学校で見守りサポーターというものがあり、私は教員志望なので参加していたが、地域の方なども参加している。これは勉強を教えるのではなく、授業中に席を立ってしまう子どもに寄り添ってあげたりする役割などをボランティアで担っている。

(石井コーディネーター)

深刻な悩みを解決するということまではいかないかもしれないが、ちょっとした悩みを誰かに聞いてもらいたいということであれば、一定のトレーニングを積んで子供に寄り添うことができるベースがある人ならボランティアとして関わってもらうことができる可能性があるということ。

(学校教育課 佐野課長)

担任の先生に言えない悩みもあるとなった場合に、学年の先生や保健室の先生に相談してもいい、いろんな大人が聞いてくれるという文化を育んでもらいたいと思っている。また、南陽市にはスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーのように家庭のことに関わっていただく福祉的な立場の方もいらっしゃる。心のありようを自分でコントロールできないときは、いったん教室から離れて別の場所でクールダウンしたり、整えたりということができる場所も校内外問わず設置している。加えて、民間の登校支援などをしていただいている方もいらっしゃる。いろんな方々の力を借りながら進めていく必要がある。様々な手を尽くして子どもたちの安全、安心な学習環境を整えていかなければならないと思って取り組んでいる。

(石井コーディネーター)

部活の地域移行についてもそうだが、今までは学校の先生一人が抱えていたものを少しずつ分散させた方が結果的に様々なチャンネルができたり、もっと専門的なものに関わることができる方向に進んでいくのではないと思う。また、教員志望だから必ずしもボランティアに参加しないといけないというのではなく、もっと門戸を広げて受け入れていいと思う。そう考えると、学校に関わることができるチャンネルというのはいろいろありそうな気がする。職業体験、部活、今のボランティアのことなど。

(委員自由発言)

相談ができるというのは非常に大事なことだが、相談＝重たいこととするのではなく、気軽に話せる場をきっかけとして段階的に話が進んでいくべきだと思っている。大人は、大人が子どもたちの話を聞いてあげないといけない、守っていかないといけないと強く感じてしまうが、大学生に限らず高校生であっても、若いもの同士だからこそ中学生の話も親身に聞くことができるのではないかと感じる。高校生になると中学生との接点がなくなってしまうような気がするが、中学生と高校生が気軽に話せる場、機会があればいいのではないかと話を聞いていて感じた。

(石井コーディネーター)

高校生の皆さんは最近、家族以外の中学生と話をすることがあったらどうか。逆に、中学生のころに高校生と話す機会はあったらどうか。やはりここに切れ目があるのではなからうか。

(同上委員)

一度中学校を離れてしまうと、再び行く機会はなかなかないのではないかと。職業体験で企業の方や保護者が中学校に足を運ぶことはあるとのことだが、高校生が中学校に行って話す機会というのはどうか。

(石井コーディネーター)

高校の説明会に行くと、校長先生がその学校のよさを話すのではなく、在校生が説明することがある。高校生が中学校に行き、そんなに大きくない会場で高校生が親と個別に話をすることがあってもいいかもしれない。

(委員自由発言)

中学生が高校に行き話を聞く機会はあるが、その逆はないと思う。

(石井コーディネーター)

中高生の接点をいい感じに作ることができたら面白いかもしれない。

(委員自由発言)

前回のまとめ資料を見ると、若い人が市外に流出してしまうという意見があり、自分もこれに共感する。私は、中学生のころの職場体験で南陽市役所の防災の担当部署へ行き、南陽市で災害が発生した場合の避難所運営を中学生のみで行うというシミュレーションし、自分たちの市のことについて考える経験をした。私たちの市について考える場があれば、流出を防ぐためには自分たちには何ができるか考えることができると思う。

(石井コーディネーター)

小学校3年生か4年生くらいで市役所の勉強をして、だんだん学年が上がるにつれて県、国と視野が広がってくると、関心は外に向いていき、高校生になれば市外や東京へ出たり世界へ出たりすることもある。一方で、地元のことを勉強する機会は薄れていくのかもしれない。地元のことを見直す機会を中高生にもってもらうのもいいかもしれない。中学生が地元の南陽市のことを考える時間はあるのだろうか。

(学校教育課 佐野課長)

南陽市のことを学ぶ、南陽市で学ぶなど、発達段階に応じて地域の実態を考慮しながら各学校で学んでいる。先ほどの意見を聞いていると、発達段階に応じてより深く学ぶという取り組みは弱かったのかもしれない。学びの主体からの声を聞くことは改めて大事だと感じた。

(石井コーディネーター)

去年自分ごと化会議を開催した新庄村では、中学生が30人程度しかいない。ここでは、「新庄学」と銘打って、村の課題を中学生が5、6人のグループに分かれて考え村議会の議長や村長の前でプレゼンするという取り組みを行っていた。例えば人口減少をどうしたらいいかということについて中学生が解決案を考えていた。また、学校の授業とは別のところになるが、小学校5、6年生が道の駅の改善プランをみんなで考えるというプロジェクトを実施していた。地元の歴史を教え込まれるだけではなく、手を動かしながら考える機会を持ってもらうことで、もっと地元へ愛着を持ってもらうという取り組みをしていた。

最後、皆さんに3分程度シートを書く時間をとって終わりたいと思うが、その前にナビゲーターから一言いただいて次回のアナウンスをして終了としたい。

(古谷ナビゲーター)

先ほど学校教育課長が学校の課題は学校だけでは解決できないというお話をされていたが、学校というのは保護者や子どもたちは卒業してしまえば終わり、先生たちも数年たてば異動する。しかし、地域の方はずっとその学校がある地域にいるわけで、地域の方が学校を支えていくということにならないと学校の活動は持続可能なものにならない。皆さんも今、こうだったらいいなと思いつかべていただいている中で、自分だったら何ができるかという部分について考えていただいたと思う。ぜひ、地域が学校を支えていくためには何ができるかというところを引き続き考えていただきたい。

(石井コーディネーター)

今日は仮の改善提案シートのまとめを配布したが、まだまだ皆さんの意見が記載されているわけではないので、今日いただいた意見もベースにしながら修正していく。次回はいよいよ最終回なので、言い残すことがないような形で終わりたいと思う。

(全体協議終了)

以上